女性の心と身体をケアする、ワンストップ支援の実現

性被害女性への救急医療

■全国各地からの見学者に説明している様子

加藤治子氏は、1968年に大阪市立大学医学部へ入学。在学中、日本人女性初の医師、荻野吟子女史を描いた渡辺淳一氏の小説「花埋み」を読んで感銘を受けたことも影響し、「女性の心と身体の健康を守りたい」と産婦人科医師への道を選択した。

1974年同大学卒業後、1975年から阪南中央病院に勤務した。1973年に設立されたばかりの同病院は、地域医療に取り組む熱気と正義感に溢れていた。加藤氏も当時の産婦人科部長と共に「女性の一生を生活背景も含めて診る産婦人科」を目指し、1986年には周産期の社会的ハイリスク研究会を組織。未婚女性の妊娠やDV被害のある妊産婦へのサポートに取り組みながら医師としての経験を積んでいった。

数多くの出産や婦人科の患者さんの診療に携わる中で、レイプによって妊娠をさせられた女性や、父親からの性的虐待を受けた子どもたちに対して「もっと丁寧なサポートができないか?産婦人科医師としてすべきことがあるのではないか?」という気持ちを抱き続けていた。

その答えを見つけたのは、2007年にカナダの女性専門病院の健康センターを訪問した時であった。性暴力被害を女性の健康問題・人権問題として、女性専門病院の中で総合的にワンストップ支援を実践している同センターの活動は、今まで自分が探していたものだと確信した。

2009年、同じ思いをもつ仲間たちに呼びかけ、「女性の安全と医療支援ネット準備室」を立ち上げ、日本で初めてのレイプクライシスワンストップセンターの設立に向けて奔走し、2010年4月、阪南中央病院内に性暴力救援センター・大阪SACHICOを開設することができた。

SACHICOでは、24時間体制で女性支援員が常駐しホットラインに対応。性暴力の被害者は緊急避妊や感染症対策などの速やかな処置が必要な場合が多く、産婦人科医も24時間体制で対応している。また、警察や弁護士、児童相談所、カウンセラーや精神科医などが連携するネットワークを確立することで、それぞれの来所者に必要な対応ができるワンストップ支援を機能させている。

SACHICO開設から4年間で、電話件数は1万7千件を超え、診療を受けた当事者の方は780人に上っている。先駆的なこの活動に対して、各地の自治体やNPOからも「ぜひアドバイスが欲しい」と求める声が多く、現在では同じようなセンターが、全国で少なくとも9カ所立ち上がっており、2013年には全国のセンターをつなぐ全国連絡会も設立した。

産婦人科医師は、昼夜を分かたず緊急対応を求められる過酷な仕事。産婦人科医師の不足が深刻な中、SACHICOの活動を通して「後輩たちに、こういう働き方も産婦人科医療に求められているということを広めていきたい」と意欲を燃やす加藤氏のライフワークは、産婦人科の女性医師へのエールとしても、大きな役割を果たしている。

■SACHICOのホットラインに対応しているスタッフと加藤氏

医療従事者部門(国内)

加藤 治子(かとう はるこ)
Haruko Kato
阪南中央病院産婦人科 医師
NPO性暴力救援センター・大阪SACHICO 代表
Obstetrician, Hannan Chuo Hospital
NPO Sexual Assault Crisis Healing Intervention Center Osaka

推薦者 **武川 恵子** 内閣府 男女共同参画局長

1949年大阪府生まれ。1974年大阪市立大学医学部卒業。大阪大学医学部産婦人科で研修した後、1975年から大阪府松原市の阪南中央病院に勤務。1986年、助産師・看護師たちと「周産期社会的ハイリスク研究会」を組織し活動。2002年同病院産婦人科部長に就任。2004年、草の根の女性団体ウィメンズセンター大阪と共に、女性総合外来「はるウィメンズクリニック」を開設。2009年、女性の安全と医療支援ネット準備室室長。2010年、性暴力救援センター・大阪SACHICOを開設、代表を務める。